



第 60 号
令和 2 年 7 月 1 日 発行
発行 発行責任者
埼玉県立がんセンター
病院長
横田 治重

基本“唯惜命”
理念

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。

目次

- 病院長就任あいさつ..... 1
- 消化器内科の紹介..... 2
- 43年間のがん研究を振り返って..... 3
- ご存じですか？自分らしく生き抜くための「人生会議」／隣がん教室のご紹介..... 4



埼玉県のマスコット コバトン



病院長就任 あいさつ

病院長 横田 治重

2020年4月1日より病院長に就任いたしました横田治重でございます。就任に当たりましてご挨拶を申し述べます。

私は2004年4月に婦人科医として当センターに着任し、婦人科がんの診療に当たってまいりました。婦人科がんの特徴として比較的若い年代から患者さんがいらっしゃるということがあり、高齢に至る様々な年齢の方の診療をする中で、それぞれの方の多様な人生に触れてきました。当センターの理念は「唯惜命(ただいのちをおしむ)」というものですが、私は着任から16年間のチーム医療の経験から、「命」は決して生物学的な「生命」のみではなく、「生活」や「人生」までを含んだ「いのち」であると考えようになりました。

もとより埼玉県立がんセンターは創立以来45年間、常に最善のがん診療を埼玉県民の皆さんに提供すべく努めてきました。その延長上で現在は県内で唯一の都道府県がん診療連携拠点病院として県内のがん診療の均てん化と向上を担っています。当センター自身の診療として具体的には、ロボット支援手術を含む手術の低侵襲化、より精細な放射線治療、様々な新規薬物療法の開発(治験)と実践、それらの基礎にある「がんと判った時からの緩和ケア」の推進、受診(前)から治療後までを通じてのがん相談支援機能の充実などに取り組んでいるところです。臨床腫瘍研究所では将来のがん患者さんへの還元を目指して研究が続けられており、さらに昨年9月には全国34か所のがんゲノム医療拠点病院の指定を受け、新たな領域の診療も軌道に乗せつつあります。

折からの新型コロナウイルス感染拡大で様々な業務の見直しが迫られる中でも、これまでの埼玉県立がんセンターの歴史を継承しつつ、患者さんの生活や人生に思いを馳せることを大切にして皆さんと共に歩んでいければと考えています。

何卒よろしくお願いを申し上げます。

消化器内科の紹介

消化器内科 科長
原 浩樹



消化器内科 科長
原 浩樹

診療体制

内視鏡部門と化学療法部門、超音波部門などに分かれて業務を担っています。内視鏡部門では、内視鏡を用いてがんの診断と、内視鏡的切除術を行っています。また、肝臓・膵臓・胆道などの臓器の診断および治療を内視鏡的に行っています。

消化器外科・放射線診断科/治療科との連携も密であり、スムーズな方針決定を心がけています。消化器に関するがんの診断と治療に関しては、専門病院として院内の治療グループだけでほとんどの領域をカバーすることが可能です。

化学療法について

抗がん剤を行う対象は、食道・胃・大腸・肝臓・膵臓・胆道のがんや、GIST（ジスト）、消化器臓器から発生した神経内分泌腫瘍などです。これらの正確な診断と、病状に応じた最も効果の期待できる治療を行うことを目指しています。実施しているレジメン（抗がん剤の投与計画や方針）はすべて、国内外でガイドラインを基に記載されている内容であり、最新かつ最も有効な治療を提供していますので、安心して治療を受けて頂いていると自負しています。

消化器内科では現在、日本臨床腫瘍学会の認定専門医である、がん薬物療法専門医が6名在籍しています。いわゆる「腫瘍内科医」という、抗がん剤治療を専門とするスペシャリストのひとつであり、最近、テレビドラマでも取り上げて放映されていたことから、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。

治療方針に関しては、ご本人・ご家族の意向を尊重し、寄り添うよう心掛けています。残念ながら、手術や抗がん剤などの治療ができなくなった患者さんに関しては、緩和ケア科と連携し、患者さんの苦痛を積極的にやわらげ、より良く過ごすためのお手伝いをさせて頂いています。

研究について

まず、臨床試験や治験についてご説明致します。新しい治療法や薬が、本当に効果があるのか、安全に使用できるのかを科学的な方法で調べて確認するために行われる試験のことを「臨床試験」といいます。臨床試験の中でも厚生労働省から薬・医療機器としての承認を得ることを目的として行われるものを「治験」といいます。いわゆる新薬（未承認薬など）については、治験の枠組みの中で実施されることになります。現在の標準治療（科学的に証明された最善な治療）は過去にがんの患者さんたちが、これらの臨床試験に参加して頂いた結果、効果や安全性が確認され、確立されてきました。消化器内科では、未来により良い治療が提供できるように積極的に取り組んでおり、全国規模の臨床試験グループ（JCOG：日本臨床腫瘍研究グループ、WJOG：西日本がん研究機構）や、世界規模の企業治験に参加しています。

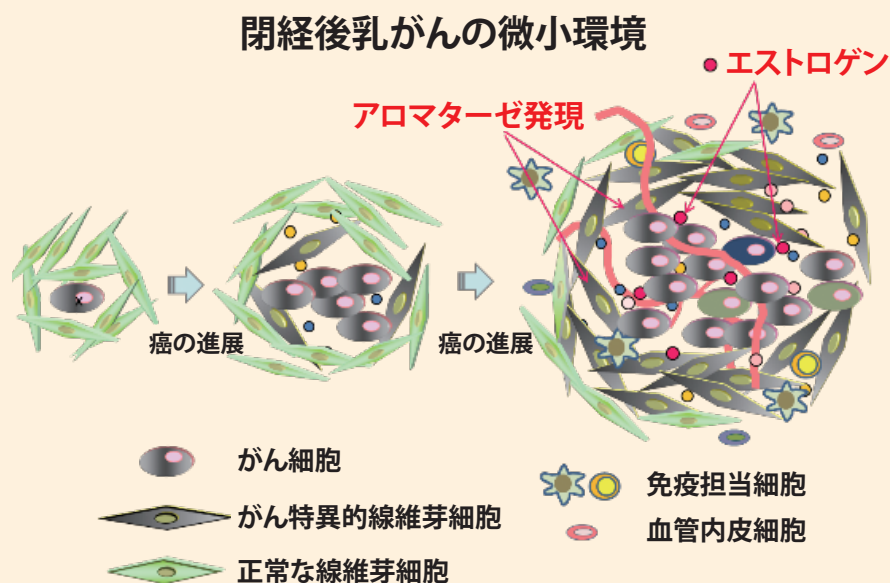
また新しい試みとして、がん組織を調べて、関連する遺伝子変化を評価する「がん遺伝子パネル検査」を2019年度より導入して実施しています。頻度は低いですが治療対象となる遺伝子変化があれば、治験を実施している医療施設にご紹介をしています。

これらに参加するには条件があり、対象となる方は限られますが、興味のある方は各担当医やコーディネーターから説明を受けることが可能です。がんの治療開発は日進月歩であることから、こうした試みを担っていくのは都道府県がん診療連携拠点病院である当院の責務であります。患者さんご自身だけでなく、未来のがん患者さんの治療研究・開発に少しでもお役に立つことを願っています。

43 年間のがん研究を振り返って

臨床腫瘍研究所
客員研究員
山口 ゆり

私は埼玉県立がんセンター開設後2年目に研究所に赴任し、43年間がん研究に携わる機会をいただきました。がん研究のはじまりは「白血病における分化誘導療法の開発」への参加でした。分化誘導療法とは、細胞分化が途中で停止し、未熟なまま増殖する白血病細胞に再び分化を誘導し、正常な白血球と同様にその寿命を終えさせる治療法で、多くの基礎研究の成果が臨床に応用されました。その後、様々な人との出会いを経て、乳がんのホルモン療法の感受性制御について、がん細胞を取り巻く環境、すなわちがん微小環境に着目した研究へと方向転換しました。乳がんの研究では多くの乳がん患者の皆様にご理解、ご協力をいただき、あらためて感謝いたします。閉経後の乳がんでは、がん細胞の周りに存在する線維芽細胞がアロマターゼ



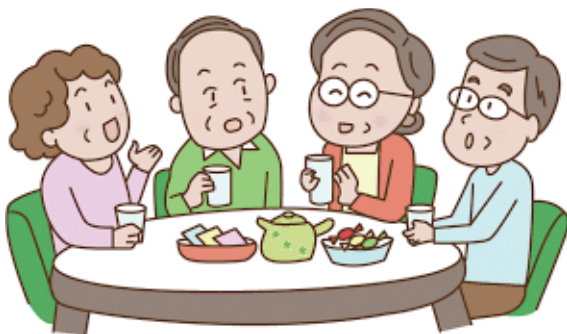
という酵素を発現し、乳がん細胞の増殖を促進するエストロゲンを作ります。私たちはこの乳がん特異的微小環境の機能をモニタリングするシステムを作り、それぞれの症例で微小環境は異なることを報告しました。がんの不均一性が分かってきた時期でした。アロマターゼ阻害剤は閉経後乳がんのホルモン療法では重要な治療薬ですが一部の乳がんは耐性を獲得します。そこで、次に、私たちは耐性モデル細胞を作り、そのメカニズムは複数あることを報告しました。現在、乳がんでは、分子標的治療薬の開発が進み、がんゲノム医療もスタートしています。今後はそれぞれの症例に適した治療薬の選択がますます重要となります。

ご存じですか？

自分らしく生き抜くための「人生会議」

緩和ケアセンター
ジェネラルマネージャー
森住 美幸

皆さんは、もしものときにどのように過ごしたいか、考えたことがありますか。そのときにあなたが望む医療やケアを受けるために、あなたが大切にしていることや望んでいること、どこでどのような医療やケアを受けたいかを前もって考える。そして家族などの近い人、医療者と繰り返し話し合い、共有する取り組みを「人生会議（ACP：アドバンス・ケア・プランニング）」と言います。ご自身の体調や気持ちの変化によって受けたい医療やケアの希望は変化しますので、繰り返し話し合うことが重要です。



命の危険が迫った状態になると、約70%の方が受ける医療やケアなどについての望みを伝えたり、自分で決めることができなくなると言われています。もしもの時のことを考えると、皆さんの中で、「痛い、苦しい思いだけはしたくない」「意識がない状態になったら人工呼吸器をつける処置などはしてほしくない」「私はできる限りのこと、延命のための治療をしてほしい」…色々な考えが浮かぶのではないかと思います。

当センターでは、病状説明や入院・退院、転院のタイミングなどで、患者さんがどのように過ごしたいと望んでいるのかを知り、共有することを大切にしています。また、看護師が行う「がん看護外来」では、患者さん・ご家族がどこで、どのように過ごしたいかを一緒に考える支援を行っています。

あなたが望む、もしもの時の医療やケアについて、皆で話し合ってみませんか？

それが自分らしく生き抜くための「人生会議」です。

脾胃がん教室のご紹介

消化器内科 副部長
清水 怜

がんという病気にかかることは、患者さん・ご家族に大きな衝撃をもたらします。そして、ショックや混乱、不安、心の落ち込みをかかえながら、病気と向き合い、治療への理解をすすめ、生活をしていくことは大変なことです。

当院では、抗がん剤治療を行っている脾胃がんの患者さん・ご家族に対して、より病気・治療を理解していただき、より安心してがんの治療を受けていただけるように「脾胃がん教室」を開催しています。「脾胃がんと抗がん剤治療」「痛み止めの上手な使い方」「副作用との付き合い方」「食事・栄養について」「がんところ」「日常生活Q&A」の6つのテーマから各

回2つをとりあげて開催しています。1つの回に10-20名の患者さん・ご家族が参加されていらっしゃいます。医師、看護師、薬剤師、栄養士、心理士が参加しており、テーマ以外でも気になることを気軽に相談することもできます。

2019年1月から開始していたのですが、新型コロナウイルスの対策のため、2020年5月現在は教室の開催は休止しています。新型コロナウイルスが収束した際には、教室を再開する予定です。

